HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エコツーリズム ： 「未踏の知」を求める観光のフロンティア
Author(s)	敷田, 麻実
Description	特集 フロンティア
Citation	まほら, 48, 18-19
Issue Date	2006-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34971
Type	journal article
File Information	shikida-490.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

旅文研の機関誌『まほら』2006年7月号掲載予定

エコツーリズム：「未踏の知」を求める観光のフロンティア

金沢工業大学 情報フロンティア学部 情報マネジメント学科 敷田麻実

夏休みを目前に控え、今年も多くの観光客が国内各地や海外へと出かける計画を立てていることだろう。安く上げることにこだわらなければ、国内外のほとんどの地域が「観光地」として楽しめるようになったのが今日の観光の特徴だ。つまり、観光地は特別な場所ではなく、どの地域も「観光地化」してきている。

こうした状況では、たとえ少し嗜好の変わった場所に出かけても、どこも同じように観光客は多いし、自分だけが特別な体験をする機会はなくなってしまっている。観光は「もう飽きた」という言葉が、至るところで客の口からこぼれる。観光サービスを提供する観光業者側も、いい加減「地球上で行けるところは行き尽くしてしまったのだ」と正直に言いたいことだろう。

それに現在の観光現場には「光」がない。観光が魅力を失ったと言い換えても良い。観光とは「国の光を見る」ことだというクリシェは、観光関係の会議のあいさつや論文などでさんざん使い古され、もはや感激もなくなったが、観光という行為自体がクリシェになってしまった感がある。これがフロンティアがなくなったという嘆きが観光分野で漏れる原因ではなかろうか。もちろん、フロンティアのない産業に未来はない。

もともと観光は、日常体験できないことを観光客自身が体験するという、ある意味で個人にとって擬似的にフロンティアを体験する、レベルの高い行為だったはずだ。それがマスツーリズム化の中で、他人がセットした舞台を行き来し追体験する「確認の旅」と化した。定住を余儀なくされた私たちが、一時的にせよ日常から離脱し、漂泊することができる機会が「観光」であれば問題はなかったのだが、それが形式的なものになってしまうと、旅先での偶然のできごと、いわゆるハプニングは期待できなくなる。

このように観光が特別な輝きを失ったのは「観光の管理」が進みすぎたからではではないのか。マスツーリズムの進展と拡大によって、観光客は出発前から「観光システム」の管理下に置かれるようになった。出かけた先では決められたコースをたどり、観光客は安心して観光する機会を手に入れた。しかしその代わりに、大切な「偶然を選択する自由」を失ったことに気づいていない。表現を変えれば、面白さや楽しさと引き替えに、安心を手に入れたということだ。

それを悔やみ、最近のインターネットの躍進をやり玉に挙げることもできようが、考えてみれば、マスツーリズムを選択したときからこのようなことは予測できたはずである。インターネットは効率よく個別観光客のニーズ実現を可能にしてくれたに過ぎない。観光客の選

択肢が増えたことは評価できるが、それとて観光客自身が一定のオプションの中から選択できるようになっただけだ。そこには偶然に何かが起きるというフロンティア特有のダイナミズムはない。また選択肢が増えてもそれをすべて選択できるわけでもないので、見かけ上の自由が増えただけだ。

このような背景があるので、エコツーリズムに代表されるSIT(Special Interests Tourism)が耳目を集め、観光客も観光サービスを提供する業界側もこぞってこの「新しい観光」に期待するのは当然のように思える。確かにエコツーリズムの現場は新しい息吹や期待に満ちているので、何かが生み出されるフロンティアだと考えることもできるだろう。

しかし単純にフロンティアだと喜んでばかりもいられない。エコツーリズムは、従来型観光ではない、いわば未踏の地だから「とにかくやってみればいい」と言う声には、地図も持たずに荒野を4輪駆動車で行くような危なっかしさを感じる。また「従来型観光の塗り替え」だけでエコツーリズムと称している観光も、ルールや規準がまだないエコツーリズムの世界を徘徊している。このような輩を許していては、魅力あるフロンティアも無法者の開拓地になってしまうのではないか。

だから、管理された観光の中でようやく誕生したエコツーリズムを、フロンティアだと言って好き放題に食い散らかしてはならない。そこは決して「ぶん取り合戦の地」ではない。フロンティアだからこそ、関係者が高い意識(ロール)を持って開拓する姿勢を大切にしたい。そして新たなガイドライン(ルール)やエコツアープログラム(ツール)を自律的に創り出す必要がある。

しかしまた、エコツーリズムが実体もなく理想だけで語られることも困る。実体験がベースの観光は、理念だけでは成り立たない。優れたエコツアーがあってこそ観光客も集まる。エコツアーという商品は、観光のフロンティアを多くの人に体験してもらうためのエコツーリズムの「見える化」だと考えていい。

エコツーリズムには、ロールを意識した関係者がルールやツールを自律的に創り出してゆくダイナミズムがある。だから「未開の知」を開拓するような知的な「ツアー」である。それこそが観光の神髄であり、そこに21世紀の観光のフロンティアを見いだすことができる。